日本舞踊とモダンダンスの出会い
尾上菊之丞作品「道成寺」の考察

藍　本　　彩

〔目的〕　この研究の目的は，異なる舞踊様式を組合わせた作品が成果を上げるとすれば，どういう理由，条件があるかを考えるものである。その具体例として，日本舞踊家とモダンダンサーが共演した尾上菊之丞作品「道成寺」（1992年７月初演）を取り上げる。

〔方法〕　舞台上のパフォーマンスとビデオ記録双方による作品の検討，そして創作過程からのデータを使うために，作者及び演者へのインタビューを行う。

〈尾上作品「道成寺」の狙い〉

1992年４月に作品の発表及び出演依頼を受けた尾上（日本舞踊尾上流主宰）の構想は，第一にモダンダンサーとの共演，第二に音楽は，鼓と笛の一調一管，第三に演目は「道成寺」の三点であった。稽古初日に当たる６月25日に尾上は，清姫役のモダンダンサー勝珠美に音楽のテープを渡し，今回の「道成寺」の意図と，役柄の説明を行う。その意図とは，「道成寺」伝説いわゆる「安珍清姫」の物語を踏まえつつ，現代にも通じる普遍的な男女の愛の葛藤，その構図を舞踊化するということ。

清姫は身分の高い若い女であり，情念の面では，愛を裏切られた娘の哀しさの表出が主眼となること。安珍は出家者であること。技術面では，各自の領域（日本舞踊・モダンダンス）の技法を使うことなどであった。

次回の稽古から実際の振りつけに入る。稽古期間は６月27日から音合わせの７月９日まで９回，時間数は１回の稽古が２～４時間であった。

〈本番の舞台〉

公演日時，1992年７月10日，虎ノ門ホールに於て。公演のタイトル「第10回舞踊作家協会展」演目のタイトル「道成寺－現世・風・回帰」　上演時間・約17分。　構成・演出・振りつけ・出演，尾上菊之丞（安珍），振りつけ補佐・出演，勝珠美（清姫）　音楽，鼓・藤舎呂船，笛・藤舎名生による一調一管。舞台背景は，黒の紗幕，床はリノリウム。衣装は，安珍・薄墨色の絽の紋付き，ベージュ玉虫の袴。これは出家者であることと，背景の黒の紗幕に溶け込んで，シテの清姫を際立たせることを意図したため。清姫・藤色シルクデシンの総タイツにロングのキュロットパンツ。脚のタイツの花びらの模様が客席からは蛇のウロコとみえ，唯一，明確に役柄を表示するものとなっている。清姫の衣装は前田哲彦。

〈舞台上の位置構成〉

上手に鼓，下手に笛の両者が，舞台中央に向かって対面し，その中間やや後方に安珍が座っている。清姫のソロの場合，鼓・笛・安珍の位置が描く三角形の中で踊ることになり，この設定が，密室的空間を形成し，二人の心理的葛藤・閉塞状況を暗示する。

〈作品の構成及び解説〉

概ね，四段の構成となっている。以下，尾上の言葉により，作品の解説に入る。

初段：まず，稽古に入る前にラストシーンの形は決めていた。男は鐘の見立て，つまり，男＝安珍＝鐘であり，既に蛇体となっている女・清姫が，安珍に絡み，鐘巻きの構図になって終わる。そして冒頭も，サブタイトル「回帰」の意味を匂わせて，ラストシーンと同様にする。安珍は出家者を表す印を結んで座している。二人の絡みの後，一旦，清姫は祈りによって離されるが，体勢を立て直し，再び安珍に向かっていく。ここまで無音にして，動きだけで緊迫感を出す。

二段：二人の回想シーンのデュエット。

三段：出家の身を思い，女から逃れようとする安珍，追う清姫，両者の葛藤。

四段：祈る安珍と，祈り伏せられようとする清姫の狂い。ラストは安珍，印を解いて一切放下し，全てを受け入れる形となり，始まりと同様，鐘巻の図となる。

〔結果〕　インタビューにより，創作過程に関しては，尾上が作品全体を統合し，勝は，尾上の指示と要求に対して，モダンダンスの技法で対応したことが明らかになった。

〔考察及び結論〕　専門誌の３つの公演批評は，概ね成功した作品と，好意的な評価になっていた。この作品が一応の成功を見た理由をまとめてみると，次の３点が考えられる。

1）男女の愛の葛藤を主題とする「道成寺」を用いたため，演出意図が共演者及び観客に，明確に理解されたこと。　2）歌詞のない音楽を使用したことにより，言葉の制約を受けずに動きを形成することが可能であったこと。　3）二つの舞踊様式において，技術の基盤となる動きの力学及び身体意識に共通点が見られること。（体の中心の感覚，動くときの軌跡の描き方，足と床との関係）

今回，日本舞踊とモダンダンスの出会いの場となった尾上作品「道成寺」は，異なる様式をそのまま組み合わせて，新鮮な意外性を感じさせつつ，前述した諸要素が統合されているところに，成果を見ることができよう。